

九州大学蔵『平語』について

中村, 萬里
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/10499>

出版情報 : 文献探究. 11, pp.36-41, 1983-03-15. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

九州大学蔵『平語』について

中村萬里

九州大学文学部国語国文研究室には、『平語』と題する袋綴じ三十冊（巻一上〜巻十五下）の完本が蔵する。奥書識語の類は存しない。又伝授物五冊（読物上下・五句物・炎上物・揃物）・蘆頂巻一冊その他も存しない。各冊の墨付は平均五十九丁。用紙は、縦二二糧横一六糧弱。字面高一九糧強。一面十行、一行平均十四〜十五字。各冊の内、巻十二下が三六丁才で最も少なく、巻十一下が七九丁才と最も多い。朱筆のハカセ吟味はあるが、発音注記（ワル・スム・ツメ・ノム）についての朱筆の加筆注記はほとんど存しない。カナや濁点は比較的多い。「上」がやや少なく、その代わりに「上」が対応している。書写者は不明であるが、巻十四下を除き全体はほぼ一筆である。書写年代については、近世末期以降の字と推定される。表紙に『平語』と記されていることから、横井也有字しの『平語』十五冊（横井緑時蔵）と同一ではないかと思われるが、也有本には白声がなく、白声の部分は概ね口説になつてゐるなどその他の内都徴証から判断しても、也有本『平語』とは別のもので、後になつて誰かが『平語』と書き改めたものようである。

本稿では、従来余り紹介されていない九大本についての一報告として、そこに豊富に存する発音注記の整理を試みたい。

その際、「安永五年九月」の淨書本といわれる尾崎家本平家正節

（略称・尾崎本）、「平家正節」の転写本というよりもその草稿本や吟味本的性格を有しているといわれる京都大学蔵平曲正節（略称・京大本）を参考資料として用いる。

作業の方法としては、発音注記（スム・ツメ・ノム）^(注3)について、それぞれ〔I〕尾崎本と京大本と九大本、〔II〕尾崎本と九大本、〔III〕京大本と九大本、〔IV〕尾崎本と京大本とが一致する場合、〔V〕九大本のみ存するものの場合とに大きく分け、九大本の存する範囲→平物（巻一上〜巻十五下）→の同一箇所での対照を主に行なう。

《発音注記対照表》^(注4)

〔注1〕 ○は一致あり、×は一致なし、※は京大本においてその語に朱及び墨の注記があることを示す。

くは九大本の用例数、くは尾崎本・京大本のそれぞれの用例数ではなく、九大本と一致した数。×例は京大本と九大本との対照において、平物の範囲で、尾崎家本にその注記が全くないわけではなく、同一箇所を省めた他の箇所^(注2)にその注記があることを示す。

〔注2〕 「ツメ」注記の例「孔雀経(雀)」・「ノム」注記の例「血脉(血)」などとするのは、それぞれ〔I〕内の字にその注記が付されていることを示す。尚、「公達達」の右の傍線は、そこに注記があることを示す。

〔注3〕 〔IV〕の場合、〔I〕のものは除く。

禪師	次路俊	俊昌俊	臣大	山(此)育王山	声高	者盛	州揚	宰奉	供奉	覺守	網覺	童小	堂歌	大	上	神勝	事勝	前前	后皇	号	山	照	土	誦	前	在	先	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(I) 〓 〓 〓

先生	先	者	州	宰	覺	網	童	堂	大	禪	上	神	事	前	后	号	北	山	照	土	誦	前	在	先			
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

武	脫	白	殿	盤	關	同	田	代	大	上	實	族	十	從	前	玄	供	禪	俊	臣	山	西	中	殿	聲	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

先	者	州	宰	供	覺	網	童	地	堂	大	上	神	事	前	后	号	坊	次	帝	書	衆	雀	貌		
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

尋	承	上	侍	神	士	全	群	幸	還	河	賀	漢					
覺	廉	天	波	雲	炎	上	諸	神	方	吏	群	臨	還	東	河	賀	漢
承	武	承	上	上	上	上	侍	騰	木	士	全	田	幸	着	王	思	羅
尋	武	承	上	上	上	上	侍	騰	木	士	全	田	幸	着	王	思	羅
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

西	塔	顯	供	關	條
信	堂	顯	供	關	條
西	堂	顯	供	關	條
○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○

禪	次	俊	臣	山	声
禪	次	俊	臣	山	声
師	俊	臣	山	声	高
○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○

と	す	通	種	車	論	千	器	ほ	着	痛	殿	署	山	政	焼	生	府	聖	酸	承	衆	古	官	武	人
とうとう	すわい	通親	種船	車牛	論詮	一人	器神	ほ儀	着還	痛頓	殿立	署堂	山影	政善	焼善	生府	府神	聖重	酸悲	承世	衆相	古上	官階	武廉	人降
○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○

し	け	閑	原	津	島	口	若	髪
い	か	閑	原	志津	津	水	諸	若
ら	さ	等	原	津	津	津	諸	若
る	か	閑	原	津	津	津	諸	若
し	け	閑	原	津	島	口	若	髪
○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○

得脱し	七世	刺々	孔雀	御青	白	日	念	念	念	念	念	念	念	念	念	念	念	念	念	念	念	念	念	念
脱	七	刺	雀	青	雪	曆	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

無骨	飛	赤	怖	嬉	三	六	空	八	誦	出	七	左	謙	使	一	公	念	六	每	二	言	五	九	念	念	念	念	念	念	念	念	
骨	掌	吉	し	し	日	観	物	菟	經	離	迴	史	徳	衆	条	運	公	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

三月	五月	五月	九月	九月	九月	念	念	真	化	引	引	打	参	黒	奉	名	名	五	列	説	官	陰	一	黑	念	念	念	念	念	念	
日	月	月	月	月	月	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公	公
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

衣鉢	六月	六月	八月	八月	八月	八月	二	二	正	正	正	正	十	十	十	十	十	十	十	十	十	七	青	四	四	四	三	三	三	三	
鉢	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

蘇悉地經卷	仙物仙	古に吉	雪雪の雪	不吉なり吉	無実子実	切なる切	一日方微巨	頭密面置置	七仏業師仙	星宿管蓋仙	確師李師師	大仏踏て仙	問絶跡地絶	四実法眼実	七月三音月	逸物物物	念仙仙	彭越越	血脈血	七条七	八条八	仙寺仙	仙事仙	帝關に關	達草に草	燃爲舌の色	一日の目	木津の達	別の別	五月月	幽篋子篋	亦陀仙
X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	
X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	
X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	

諸仏も仙	悉火悉	漢語長和語卷	御初御	火穴湯	橘内橘	設命	畢命畢	持律の律	大仏の仙	半日の日	山がつのつ	利物の物	御出なる出	大切なれ切	発願	二月に月	諸仏に仙	師に師	三密行法密	供仏施僧仙	生者必滅必	三月八日月	解脫	諸仙	五節節	鳳關	生者必滅滅
X(1)	X(1)	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)
X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)	X(1)

發音注記対照表より、(四)に多くの一致を見る事ができる。つまり、發音注記から見た場合、九大本は京大本と重なるものを多く有している。このことは、朱筆の節ハカセからも窺知される。例えば、卷一上で九大本・京大本には左に朱筆、尾崎本には存しないものとして次のようなものがある。

- 花咲実なる北カ (九京・左朱) ↓ (尾204ナシ)
- 深フ平治ト (九左朱) ↓ (京「玩」左朱) ↓ (尾35「元」ナシ)
- 詠めて帰る (九京・左朱) ↓ (尾42ナシ)
- 都に残る (九京・左朱) ↓ (尾42「に」ナシ)
- 蓬姓 (九京・左朱) ↓ (尾45ナシ)
- 風すさまし (九京・左朱) ↓ (尾49ナシ)
- ◇却て (九・左朱) ↓ (京ナシ) ↓ (尾50同)

▽尾崎本は大学堂書店刊影印本の頁数を示す。

以上筆者なりに九大本に豊富に存する發音注記のうち「ス・ム・ツ・メ・ノム」について整理した。發音注記に関する限りにおいては、九大本は京大本系統の譜本に近い関係にありそうである。しかし、このことについては、今後、詞章、節ハカセなどいろいろな面からの詳しい検討をしていく必要があると思われる。

ともあれ、九大本はそれら發音注記の豊富さに加え、濁点符・濁音がナもたくさん存していることなど、国語史を考える上で興味ある資料である。

【注】

類

口説 子に吹く皆諸清の依りたる界

啓せし教上れ文を人嫌ふ及んを武

時忠感依前此はもと向く部へ上

進るとくちと名羽の流出前へりく依

同巻五ノ上二六丁ウ(「スム」注記が見える。)

白中と結頼として大石あり白行

ハウカリーニニ司ニ 命と命と命と安表世果れ疎院

同巻七ノ下四一丁オ(「ツメ」注記が見える。)

〜〜〜 鐘あり〜〜 念仏と

- (1) 大学堂書店刊(昭和49年)影印本使用。
- (2) 臨川書店刊(昭和46年)影印本使用。
- (3) 平曲譜本の発音注記については、奥村三雄氏『平曲譜本の研究』(昭56年桜楓社)第九章参照。尚、京大本、九大本には存する「ワル」注記が尾崎本には皆無のため、今回の報告からは除いた。

- (4) 列挙順は注③の「発音注記一覽」に、又語の規定は『平家物語総索引』(金田一春彦氏等編本や荳柴治氏編本)によった。
・京大本における朱筆等の加筆注記について、「朱筆の発音注記や譜記訂正など藤村氏の加筆より古いらしい注記がかなり存する」(『平曲譜本の研究』91頁)の記述があるが、筆者は、まだ京大本自体の朱・墨の性格といつたものを十分に理解しきれないでいる故、一応朱筆と墨筆の区別を示すにとどめておく。尚、対照表で、九大本の「スム」注記は京大本の朱に、「ツメ・ノム」は墨に多く的一致を見るが、京大本では「スム」は朱、「ツメ・ノム」は墨で付されるものが絶対数として多いという理由で、その他の強い理由はなさそうである。
- (5) 奥村先生は『平曲譜本の研究』(102,120頁)、「平曲譜本に反映したアクセント」(『国語と国文学』昭45年10月号)、京都大学蔵平曲正節(昭46年臨川書店刊)解題の注4などにおいて、九大本を尾崎本等の「平家正節」に準ずるものとお考えになつておられるようである。